

地名を通して見る歴史

おやさと研究所准教授
森 洋明 Yomei Mori

現在、アフリカ大陸には54カ国がある。最も新しい国は南スーダンで、長年にわたる北との内戦を経て、2011年に国民投票の結果独立を果たした。世界で最も新しい国でもあるが、残念ながら国政は今も安定していない。この「スーダン」という名前は、アラビア語で「黒い人」を意味する言葉に由来し、サハラ砂漠以南の広い地域を指す地域名でもあった。

アフリカの国名の特徴として「ia」の音で終わる国名が多いことが挙げられる。「アルジェリア」や「リビア」「チュニジア」「ギニア」「ナイジェリア」「モーリタニア」「ケニア」「タンザニア」「ガンビア」「エリトリア」「ソマリア」などだ。これはもともとラテン語やギリシャ語の「～の国」「～の土地」といった意味の「ia」という接尾辞からきている。したがって、ヨーロッパとは地理的に近いサハラ砂漠を中心とした北アフリカ地域にこうした国名が多い。ちなみに、ヨーロッパでも「イタリア」は言うまでもなく、「スロバキア」や「クロアチア」「オーストリア」「ルーマニア」などがあり、さらに広く見れば「オセアニア」や「アジア」にもこの「ia」の影響が見られる。地名から史実やその背景などが読み取れるが、アフリカでも同様である。他のヨーロッパに先駆けて沿岸のアフリカと接触し奴隷貿易などを行ったポルトガルは、沿岸都市の地名にその痕跡を残している。コンゴ共和国の第二都市「ポワント・ノワール」(Pointe-Noire)は、ポルトガル語の「Punta Negra」をフランス語に変換したものである。アンゴラの首都「ルアンダ」は、1575年にこの地に到着したポルトガルの航海士 São Paulo de Assunção Luanda に由来している。また、ベナンの首都「ポルト＝ノーヴォ」(新しい港)は、ポルトガル人の建設した街であり、現在もその名前は残っている。

15世紀から19世紀まで行われた奴隷貿易時代の痕跡もアフリカの地名から読み取れる。アフリカ大陸と新大陸アメリカ、そしてヨーロッパの間で行われたいわゆる「三角貿易」では、ヨーロッパに莫大な利益をもたらした。18世紀にはその最盛期を迎え、ヨーロッパの国々が競ってこの貿易に参入した。アフリカから新大陸に持ち出されたのはもっぱら黒人奴隷でありその総数は1千万人以上とも言われている。奴隷以外にも象牙や金、胡椒といった取引もあった。こうした貿易が盛んだった西アフリカ一帯、とくにギニア湾では取引される商品の名前が地名ともなり、当時の西アフリカの地図には「穀物海岸」や「黄金海岸」「胡椒海岸」「奴隷海岸」などと記されていた。その名残として現在も「コートジボワール」(Côte-d'Ivoire)のように、「象牙海岸」という名前がそのまま国名となっている。

18世紀、大西洋をまたぐ奴隷貿易がその最盛期だった頃、同時にヨーロッパでは啓蒙思想家たちが活躍する時代を迎える。これまでの神中心の世界観から人間中心の世界観へ移行する過程にあって、啓蒙思想家にはこの奴隷制度やその対象であった黒人についての言説も少なくない。当時彼らが黒人や奴隷制をどのようにみていたのかはまた別の機会に譲るとして、「人権」の意識の高まりとともに奴隷制に対する批判的な論調が多くなり、イギリスでは1787年に奴隷貿易廃止協会が結成され、1807年に奴隷貿易の廃止を決定した。シェラレオネの首都「フ

リータウン」(Freetown)は、「自由の国」の名の下にイギリスの解放奴隷の黒人たちが入植してできた港街であった。同じように、現在のガボンの首都「リブールヴィル」(Libreville)も、解放奴隷が多く送られたところからこの名前になった。名前の意味は自由(libre)都市(ville)である。同じギニア湾に面している「リベリア」という国は、アメリカの奴隷解放によってアフリカに帰還した人たちによって作られた、ラテン語で自由の意味である「Liber」と前述の「ia」が合成された名前である。

奴隷制が廃止されていく過程において啓蒙主義者たちの「人権」の意識の目覚めもあったが、新大陸で奴隷の需要が減少した影響もあったと指摘されている。奴隷は固定身分だったので、奴隷が奴隷を産むことによって、新たに奴隷をわざわざアフリカから高いリスクを冒してまで調達する必要がなくなったのである。さらには、労働力の必要性が少なくなったことも関係している。ヨーロッパの各国は科学技術の発達によって産業革命が起こり、それまでの家内生産から工場での大量生産時代を迎えるようになっていた。そのような状況でアフリカに対しては、これまでの奴隷という人的資源から産業を支えるエネルギー資源の供給源としてのまなざしが向けられることになっていったのだ。

そこでアフリカの地理を正確に知ることが重要な課題となっていく。「どこに何があるのか?」「地理はどうなっているのか?」それまでのヨーロッパとアフリカとの関係は、沿岸部の有力な王国との貿易が中心だった。したがって、数百年にわたる奴隷やさまざまな商品の貿易による関係があったとしても、ヨーロッパ人にとってアフリカ大陸は相変わらず未知の大陸だったのである。そこで、デイヴィッド・リヴィングストンやヘンリー・モートン・スタンリー、マンゴ・パークといった探検家たちが「暗黒大陸」で活躍するのだった。

こうした探検家が関係する地名も数多く残っている。イギリスの探検家でアフリカの地理的発見に貢献したリヴィングストンが命名した「ヴィクトリアの滝」は、言うまでもなく当時のイギリス女王の名前をそのまま取っている。彼は発見したものに対しては通常は現地の名前を採用していたようだが、現在では世界三大瀑布に数えられる壮大な滝を前にイギリス王に敬意を払ったと言われている。コンゴ河には彼の名前がついた「リヴィングストンの滝」も存在する。このリヴィングストンが行方不明になった時、アフリカへ送られた捜索隊の責任者がスタンリーだ。彼はその後ベルギー王レオポルド2世の私有地となったコンゴの開発にも携わり、コンゴ河の中州が広がって湖になっているところは今も「スタンリー・プール」と言われている。また、アフリカ大陸3番目の標高でコンゴ東部に位置する山は「スタンリー山」と名付けられている。ちなみに、現在コンゴ民主共和国の首都キンシャサは、かつて「レオポルドヴィル」(Léopoldville)と呼ばれていた。

このスタンリーと競い合うかのように赤道アフリカで活躍したのが、アフリカ開発に遅れをとっていたフランスが送ったサヴォルニャン・ド・ブラザである。現在のコンゴ共和国の首都「ブラザヴィル」(Brazzaville)はこの探検家の名前に由来している。